

21世紀教育センターニュース

平成22年(2010年)3月 第16号

■ 高校教育と大学教育の接続 -弘前大学高大連携シンポジウム・高大連携公開講座-	1～2
■ Moodle体験記	3～4
■ テーマ科目の現場から	5～7
■ 後期学生アンケート	8～11

高校教育と大学教育との接続

－弘前大学高大連携シンポジウム・高大連携公開講座－

弘前大学21世紀教育センター長 木村宣美

高校教育と大学教育との接続について、『初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）』（平成11年12月16日中央教育審議会）の「第1章 検討の視点」の中で、「今後、高等学校の多様化が進むとともに、大学進学率の一層の上昇が見込まれる中、これまで以上に多様な能力、履修歴等を有する学生が大学に進学してくることが予想される。このような状況を踏まえ、初等中等教育と高等教育との接続の改善を図る」ことが、この答申の目的であると明記されている。その際の検討の視点の中に、(1) 後期中等教育段階における多様性と高等教育段階における多様性との「接続」、(2) 主体的な進路選択が含まれている。この答申の「第4章 初等中等教育と高等教育との接続の改善のための連携の在り方」において、(1) 入学者選抜だけでなく、カリキュラムや教育方法等を含め、全体の接続を考えていくべきであり、高等学校と大学の両者がいかにして、それぞれの責任を果たしていくかという観点から、両者の教育上の連携を拡大することが必要である、(2) 具体的な教育上の連携方策として、1) 高等教育を受けるのに十分な能力と意欲を有する高等学校の生徒が大学レベルの教育を履修する機会の拡大方策（科目等履修生の活用等）2) 高等学校における生徒の能力・適性・意欲・関心等に応じた進路指導や学習指導の充実（高等教育の具体的な内容や、将来の職業選択との関係、体験入学の機会の拡充）3) 高等学校関係者と大学関係者の相互理解の促進（情報交換し理解を深める「連携協議会」等の開催の推進）を図ることが重要であり、大学の教員が高等学校において、学問の紹介や講義を行うこと

や、逆に、高等学校等の教員が大学での補習授業に協力することなどの試みを一層推進させるべきであると提言されている。しかしながら、『学士課程教育の構築に向けて（答申）』（平成20年12月24日中央教育審議会）では、「高大連携の取組の現状としては、いまだ散発的な状態にとどまっている」ことが、改善されなければならない課題として指摘されている。

これまでの高大連携に関する答申を踏まえ、社団法人国立大学協会主催で、平成21年12月15日（火）に学術総合センター 一橋記念講堂において、「第3回高大接続ワークショップ ―キャリア形成に向けた高大接続の構築―」が開催された。その目的は「我が国では、少子化や大学進学率上昇の影響により、学力不問の入学許可や大学卒業時の学力へ疑念が生じるなど、高等学校教育と学士課程教育の抜本的な改革が求められている。国立大学協会「高大接続検討作業チーム」は、これまで2度のワークショップを開催し、国内外の高大接続に係る試験制度を中心とした現状と課題を確認するとともに、我が国における高大接続に係る教育活動の事例を検討してきた。その結果、高等学校と大学が連携して、両機関の教育活動を接続することの可能性を見出すとともに、高等学校教諭と大学教員との意欲に満ちた共同作業が両者の教育活動の改善に大きな役割を果たす可能性を確認することができた。これらの結果をふまえ、今回のワークショップは高等学校と大学とを連続した学習期間としてとらえたキャリア形成という視点から、下記の事柄を明確にすることを目的と

して開催する。(1) 関係者が学習者のキャリア形成の上で高大接続が重要な教育課題であることを認識する機会とすること (2) 個々の大学が地域の高等学校と連携しながら高大接続教育を実現するために克服しなければならない要件は何かを明確にすること (3) 開発された教育プログラムが他大学でも高大接続単位等として認証される可能性と、それに必要な要件を探ること」であった。

高等学校との接続・連携に関する事業の一環として、第8回弘前大学高大連携シンポジウムが「高校時代に大学の単位を取る」というテーマで、平成21年8月6日(木)に開催された。本学では、平成13年10月に「生徒へ多様な学習機会を提供したい」との高等学校からの申し入れに対し、平成15年度から平成18年度まで「高大連携高校生セミナー」が開講された。さらに、平成19年度からは「高大連携公開講座」が開講され、単位認定が可能となり、平成21年度入学生に対して本学に入学した場合に卒業所要単位として認定されるシステムが導入された。今年度の高大連携シンポジウム(詳細は、21世紀教育センターニュース第15号(平成21年(2009年)9月発行)を参照)では、高校時代に高大連携公開講座を受講し入学後に単位が本学の単位として認定された学生、高等学校教員、本学教員による話題提供と意見交換がなされた。話題提供者の感想として、大学での授業を通じて学びたいことが明確になった、大学での授業や環境に慣れることができ有意義であった、進路選択・決定にとっての貴重な機会であった等があった。『弘前大学高大連携公開講座規程』(平成19年2月19日制定)の第2条には、「高大連携講座は、高等学校の生徒に対し、本学の教育内容の理解を深めさせるとともに、高等学校における生徒自らの進路決定への意識的な取組の促進に協力することを目的とする」と記されている。この規程の目的は、十分に達成されているように思われる。このシンポジウムを通して、高等学校

での履修を前提とした授業内容が提供されていることもあり調整が必要である、受講することのできる高等学校には地理的に制限がある等、工夫が求められる課題も併せて指摘された。この問題は、国立大学協会主催の高大接続ワークショップや本学の教育・学生委員会においても検討が必要であることが認識されている。弘前大学公開講座「高・大連携高校生セミナー」の受講生数は、平成15年度前期25名・後期36名、平成16年度前期18名・後期7名、平成17年度前期22名・後期46名、平成18年度前期29名・後期29名、計212名が本学の21世紀教育(教養教育)科目・専門教育科目を受講した。また、「弘前大学高大連携公開講座」は、平成19年度は前期29名・後期16名が履修し、単位を修得した高校生は前期26名・後期12名である。平成20年度は前期24名・後期16名が受講し、前期17名・後期13名が単位を修得した。今年度は前期24名・後期22名が受講し、前期は14名が単位を修得している。このような評価及び単位認定の厳格さは、本学教員の教育に対する真摯な姿勢の現れである。すなわち、高大連携公開講座を受講する(本学に入学する可能性のある)高校生と本学学生との間には単位認定という点において何ら違いはないという姿勢が示されているように思われる。今年度で8回目となる弘前大学高大連携シンポジウム(パネルディスカッション形式)は、高等学校と大学の教育内容をお互いに知り意見交換をする目的で、平成14年度から毎年テーマを定めて実施している。これは、21世紀教育センター運営委員会(FD・広報専門委員会)が企画・立案しているものである。これまで、本学の高大連携シンポジウムのテーマには、教育内容・方法等に関連する内容から高校生の学習の動機付けに及ぶ取組が含まれている。今後は、学士課程教育と高校教育の接続を図るという視点のもと、高大連携事業の更なる推進及び充実が必要であるように思われる。

2009年12月09日に実施されたムードル講習会への参加について、農学生命科学部の杉山修一先生の参加体験記を掲載しました。今後の21世紀教育のツールの改革改善に資するものと考えられるムードルについて、可能性と課題点を指摘していただきました。 FD・広報専門委員 中澤勝三

「FD研修会-Moodleを使った 授業コンテンツの構築に向けて」に参加して

農学生命科学部 杉山修一

平成21年12月9日に開催されたMoodle講習会に参加した。Moodleとはe-Learningシステムの一つで、授業管理を目的としたソフトである。Moodleについては、21世紀教育センターニュースの第14号(平成21年3月)に佐藤友暁氏(総合情報処理センター)の解説があるので参照されたい。Moodleは総合情報処理センターの教育用サーバに既に入っており、利用申請をすれば利用可能な状態になっている。すでに、何人かの先生はこのソフトを利用した授業をされているようである。私は、この研修会に参加するまでは、Moodleはどのようなものか全然見当もつかず、短時間の研修でもこのシステムが十分に理解できたわけではない。

(1) Moodleで何ができるか

センターニュースの記事の中で佐藤氏はMoodleでできることとして以下の9点をあげている。

- (1)レポート提出
- (2)資料配付
- (3)掲示板
- (4)小テストと自動採点
- (5)アンケート
- (6)グループワーク
- (7)出席管理

(8)学習の記録

(9)成績管理

これ以外に、受講者同士のチャットやフォーラム、また、教員と学生とのオンライン上での会話も可能である。

しかし、上記のことを行うには、ネットワークで接続されたコンピュータが必要であり、必然的に授業は情報処理室で行う必要がでてくる。したがって、実際にMoodleを利用することのできる授業は情報処理教育か統計の授業に限られるだろう。また、レポート提出や小テスト、出席管理は通常の授業でも行っており、特にMoodleでないとできないものではない。レポートはメールを使えばよいし、少し時間はかかるが小テストもアンケートも教室で配付すればよいだけである。また、操作も短時間の講習ではなかなか理解できず、コンピュータリテラシーが高くないと使いこなせそうもない。結論から言うと、このシステムはあまり、普及しないだろうということになる。

(2) e-Learningの可能性

Moodleについては、否定的な評価であったが、私は必ずしもe-Learningに否定的なわけではない。e-Learningとはコンピュータやネットワークを使っ

た学習システムのことであり、そもそも受講者の自習用に作られるものである。このことから言うと、授業の中で利用するより、むしろ受講者の予習と復習用に利用するのが適していると思われる。弘前大学では平成 22 年度から、単位の実質化のためにシラバスに「準備学習（予習・復習）等の内容」を記載する欄が新しくできた。これまでの大学の授業では、学生は毎回予習や復習をするのではなく、試験前だけに勉強するのが一般的だった。単位の実質化のために毎回予習・復習をするように言われても、学生はとまどうと思われる。教員にしても、毎回の授業で何を予習・復習するかを指示することも必要になる。そこに、e-Learning が活用される場があるのではないだろうか。

予習・復習用に参考文献などの資料を紙媒体で配付すると膨大なコピーが必要になる。しかし、e-Learning を利用すると、必要資料はすべてサーバのコンピュータにおくことができ、受講者は必要に応じ端末から資料を読むことができる。教員も授業に関連する参考資料の必要部分をコピーし、pdf ファイルに変換して授業用のフォルダーに入れておけばよい。また、授業で使ったパワーポイント資料をフォルダーにおけば、学生はそれを見ながら復習もできる。

このシステムを作るには大きな投資は必要ない。教育用サーバに学生が自宅からアクセス可能な授業ごとのフォルダーをつくるだけでよい。しかし、この場合、著作権の問題がでてくるだろう。著作権法第 35 条第 1 項の規定では、「学校その他教育機関において教育を担当する者とその授業を受ける者は、その授業の過程における使用に供することを目的として、必要と認められる限度で公表された著作物を複製することができる」とある。この規定により、論文の図表のコピーや雑誌や Web の写真などを授業で資料として使っている。仮に、これら授業資料を学外誰でもアクセス可能なフォルダーにおいた場合には著作権の問題はどうなるのだろうか、検討が必要だろう。

単位の実質化が求められ、予習・復習が義務化される流れの中で、教員も準備が必要になる。この場合、Moodle のような e-Learning 用の使いにくいソフトよりむしろ、外部からのアクセス制限のあるサーバを利用できることの方が格段に利用勝手がよいのではないだろうか。以上が、今回の Moodle 講習会に参加した感想である。

テーマ科目の現場から

弘前大学の教養科目は、「21世紀教育科目」と称され、次代を担う学生が学ぶべき科目群から構成されているが、その中で「テーマ科目」という科目群がある。それぞれの専門性を有した教員が個別に、あるいは何人かでオムニバス形式をとって、教養性と専門性、あるいは時代のトピックスに的を絞ったまとまりを与えた科目である。

『21世紀教育センターニュース』では、それら科目の中から「好評」だった科目を適宜取りあげて、授業の趣旨や内容を紹介し、あわせて、同科目を受講した学生の感想や意見を掲載している。本16号でも学生の「受講評」を掲載することができた。原稿をお寄せいただいた高瀬先生と学生の皆さんに深甚の謝意を表する次第です。

FD・広報専門委員 中澤勝三

映像の「力」に負けないように

教育学部 高瀬雅弘



「戦後日本の子ども文化」は、毎回「食べる」「学ぶ」「着る」といったひとつの行為を取り上げ、当時の映像を通して、子どもを取り巻く環境や大人の子ども観の変化について考える授業

です。戦後という時代も60年あまりが経過し、「歴史」となりつつあります。そうした状況のもとで、単に子ども「について」考えるだけでなく、子ども「を通して」ひとつの時代を読み解く授業にしたいと考えていました。

ビデオを用いた授業というのは、一見ラクなように思えますが、かなりのプレッシャーがかかります。映像のもつ「力」に負けないだけのインパクトある説明が必要となるからです。社会学的なものの方・考え方を、うまく映像にマッチさせられたかどうか

については、まだまだ課題として残っているように感じています。

授業冒頭での、リアクションペーパーに書かれた質問への回答は、平成の子ども（学生の皆さん）と昭和の子ども（私）との相互交流のような機会になりました。世代差を思い知らされもしましたが、ともに学べたことを幸せに思っています。

前期「戦後日本の子ども文化」を受講して

教育学部2年 佐々木美緒

私はただ興味本位で「戦後日本の子ども文化」を受講した。しかし、その講義で得られるものは多く、講義を受けていて楽しい・興味をひかれる、というのが正直な感想であった。

この講義の特徴は、毎回「食べる」「学ぶ」「買う」などのテーマが設定されており、子どもや青少年にまつわる行為に対してどのような文化が生まれ出されてきたのかを紹介していくのである。テーマ設定の幅は広く、先ほど挙げたようなテーマから、「就職

する」「荒れる／キレル」など私たちの興味関心を引くようなものもある。毎回資料としてプリントが配布されるのだが、そのプリントには変化などを示すグラフ・新聞記事・その当時を象徴する写真などの真面目な資料から、わかりやすく説明するための「ドラえもん」などのマンガの一部を記載したのまで幅が広く、とても手が込んでいます。

また、講義の導入部分では、「就職戦線異状なし（「就職する」の回）」の一部を生徒に見せたり、駄菓子を配布したり（「食べる」の回）、高瀬先生が制服を着て講義をしたり（「着る」の回）と高瀬先生のはや趣味の領域に踏み込んでいるのではないかというくらい手が込んでいた。

各テーマに対する踏み込みも深い。「着る」の講義では、制服がその時代の象徴として扱われたことが紹介された。例えば、制服がもともと水兵の運動服として導入されたこと、学歴社会が社会に浸透してくると徐々にエリートの象徴として扱われ、大学紛争以後は大人からの押しつけだとして子どもっぽさの象徴として扱われたことなどである。中学・高校時代に何気なく着ていた制服であったが、それが時代背景とともに持つ「意味」を変容させ、そして制服を着ている私たち自身が制服に着られていたことは実に興味深かった。

私が思うに、枠にはまった21世紀教育や通常のテーマ科目よりは、こういった先生方の得意分野・特色が強烈に出る特設テーマ科目の方が学生の興味・関心を引くのではないだろうか。私自身この授業の他に特設テーマ科目を3つほど受けたが、そのどれもがやりがいのある、学生が興味関心を持ち主体となって受講できる授業だった。いろいろなことに手を出してみるものだった。

『テーマ科目の現場から』

人文学部2年 齋藤 秀明

私が戦後日本の子ども文化というテーマ科目を受講したきっかけは、『戦後日本の文化』ではなく、『戦後日本の子ども文化』をテーマとしている点に惹かれたからです。私たちの世代の子ども時代はすでに日本は経済大国として発展を遂げた後であり、多くの子どもたちが不自由なく豊かな子ども時代を過ごしたと思いますが、物質も金銭もなく、社会保障もインフラも整備されていない戦後日本に生まれた子どもたちは、どのような子ども時代を過ごしたのか知りたいと思いました。

そのうえ、戦後日本といえば、ちょうど私たちの親世代が子ども時代を過ごした時期であり、私たちの親世代から見た当時の日本の姿を知りたいと思ったのも、この講義を受けたきっかけの1つです。

この講義では、戦後日本の政治や、経済発展などのありきたりなものを見るのではなく、当時の子どもの遊びや着ていた服、おやつなど、他の講義では扱われない特徴的な点に焦点を当てていました。おそらく、私たちの誰もが経験した身近なことがテーマに挙げられていたので、非常にわかりやすく、より深い知識を得ることが出来たのだと思います。

特に印象的だった講義は、高瀬先生が学生のコスプレをしながら、学生服の持つ機能や学生服の歴史について考えるという講義でした。

また、おやつについて学ぶ講義は、実際におやつを食べながら、戦後日本の時期でのおやつ果たす役割を考えるといった印象的なものでした。

このように、斬新で今までに受けたことのないような雰囲気だったのも、この講義を受けて良かったと思える要因の1つでした。

『戦後日本の子ども文化』を受講して

人文学部2年 佐藤 知可子

私達は当然戦後生まれ、親や学校の先生、友人といった多くの人に囲まれた中で育ってきたわけであるが、その育ってきた環境について考える機会が少なかったし、ましてやその環境を現代とは違う日本と比較したことなどなかった。この講義では、毎回さまざまなテーマを掲げ、そのテーマについて多様な角度から見て、考えていくことで現代と戦後の日本の違いを「文化」として認識することができた。

講義で掲げたテーマは、「着る・装う」「学ぶ」「就職する」などといった私達の誰もが体験する身近であり重要なことばかりであった。こういった身近なテーマであったからこそ、現代との相違点が理解しやすく、更には現代と戦後当時それぞれの問題点についても自分自身と重ね合わせたうえで考えることができたように思う。

また、この講義では毎回多様な映像資料を用いたことも、テーマをより身近なものとして捉えるのに役立った。扱った映像の内容としては、戦後当時の様子をありのままに伝えるニュースや、テーマに関

係したドラマや映画などで、どの映像にも私の知らない日本の姿が映しだされていた。どれも面白く、毎回見るのが楽しみであったこともこの講義の魅力であった。

この講義を行った高瀬雅弘先生の話はとても理解しやすく、先生自身の体験談や私達受講生の質問に対しての答えは、非常に分かりやすく楽しいものだった。また、前述した映像資料以外にも、さまざまな資料を毎回配っていただいた。その内容はもちろんテーマによって異なるが、データのグラフや写真、漫画ドラえもんからの抜粋などで、どれも見ることでそのテーマについて考えやすくなった。

この講義では、さまざまなテーマのもとで現代の日本と戦後の日本を見て、その違いを「文化」として捉えることを目的としていた。私はこの講義を受講したことで、知らなかった日本の姿を見ることができたし、自分自身が育ち、生活してきた環境について考える良い機会になった。また、「文化」という分野の新たな一面に触れることができたように思う。この講義が再び開講されるのであれば、ぜひ受講することを勧める。

平成 21 年度後期 21 世紀教育に関する学生アンケート（1 年生のみ）

21 世紀教育を受講した学生アンケートの結果を掲載します。今年度入学した学生の「基礎ゼミナール」に関するアンケートと、21 世紀教育に関する学生アンケートの結果です。授業内容ももとよりですが、学生が受講を希望する科目が、他の科目と時限がかちあったり、希望受講生が多数で、受講できなったりするケースが比較的多い事実が判明する。

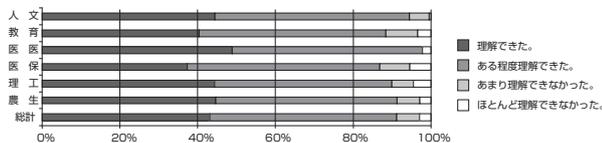
学生アンケートに関する以下の分析を参考にして、今後の解決が図られていく指針になればと考えます。

FD・広報専門委員 中澤勝三

21 世紀教育では、履修体制を点検するとともに、受講生の意識を把握し要望を授業の改善に役立てるために、学期ごとに学生アンケートを実施しています。平成 21 年度後期のアンケートは、1 年生を対象に、履修登録時に Web を使って実施されました。回収率は 56.1 % で、前期（38.4 %）を上回りました。設問ごとの回答結果は以下のとおりです。

設問 2：後期の履修ガイダンスの説明で、21 世紀教育の履修のしかたが理解できましたか？
(回答数 779)

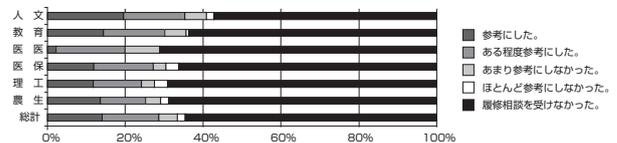
- ・理解できた (43.1%)
- ・ある程度理解できた (48.0%)
- ・あまり理解できなかった (5.9%)
- ・ほとんど理解できなかった (3.0%)



全体の 9 割以上がある程度以上理解できたと回答しており、4 割以上が理解できていなかった同年度の前期に比べて、大幅に改善されています。これは、履修ガイダンス時の説明が前期よりもわかりやすかったというよりも、前期の履修を通して、学生自身が 21 世紀教育の仕組みや履修方法について理解を深めたことによるものと考えられます。

設問 4：履修相談で受けた指導を履修にあたって参考にしましたか？ (回答数 779)

- ・参考にした (14.1%)
- ・ある程度参考にした (14.5%)
- ・あまり参考にしなかった (4.7%)
- ・ほとんど参考にしなかった (2.1%)
- ・履修相談を受けなかった (64.6%)



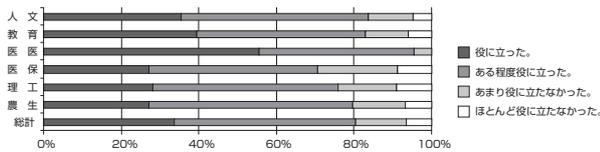
同年前期には回答者の 7 割以上が履修相談を利用していたのに対して、後期に履修相談を受けた学生は回答者の 3 分の 1 にとどまっています。しかし、履修相談を受けた学生のうちで相談内容を履修の参考にした学生の割合は、前期と同様 8 割にのぼっていました。後期の履修相談の必要性は、全体として入学直後の前期ほど高くないものの、不安な学生に対する相談窓口として機能しているようすがうかがえます。履修相談の利用割合に学部間で大きな差があった前期に比べると、後期はそれほど大きな差は見られませんでした。

以下に今年度入学生の、「基礎ゼミナール」に関するアンケート結果を示します。

設問4：「基礎ゼミナール」は、大学の学習や生活になじむために役立ちましたか？

- ・役に立った 262名 (33.6%)
- ・ある程度役に立った 364名 (46.7%)
- ・あまり役に立たなかった 103名 (13.2%)
- ・ほとんど役に立たなかった 50名 (6.4%)

(回答数 779)

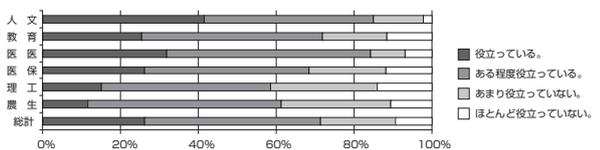


「役に立った」「ある程度役に立った」と回答した学生は全体の約8割で、概ね大学の学習や生活になじむための一助となっていることが窺えます。また、最も割合が高かったのは医学部医学科 (95.6%) で、最も低かった医学部保健学科 (70.5%) と 25% 程度差がありましたが、大学環境のどこに注目してゼミナールを展開したかによる違いとも受け止められました。

設問5：「基礎ゼミナール」は、レポートなどの文書作成に役立っていますか？

- ・役に立った 203名 (26.1%)
- ・ある程度役に立った 351名 (45.2%)
- ・あまり役に立たなかった 151名 (19.4%)
- ・ほとんど役に立たなかった 72名 (9.3%)

(回答数 777)

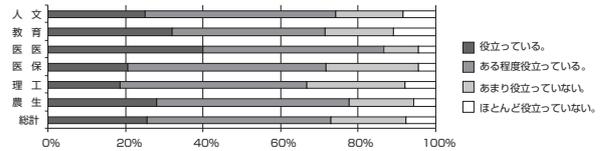


設問6：「基礎ゼミナール」は、口頭発表などに役立っていますか？

- ・役に立った 200名 (25.6%)
- ・ある程度役に立った 369名 (47.2%)
- ・あまり役に立たなかった 152名 (19.5%)

- ・ほとんど役に立たなかった 60名 (7.7%)

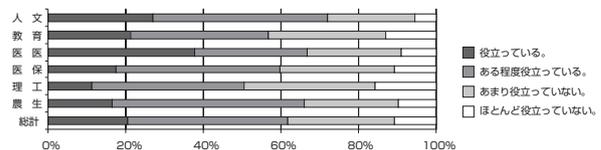
(回答数 781)



設問7：「基礎ゼミナール」は、資料を探す際に役立っていますか？

- ・役に立った 159名 (20.4%)
- ・ある程度役に立った 322名 (41.3%)
- ・あまり役に立たなかった 215名 (27.6%)
- ・ほとんど役に立たなかった 83名 (10.7%)

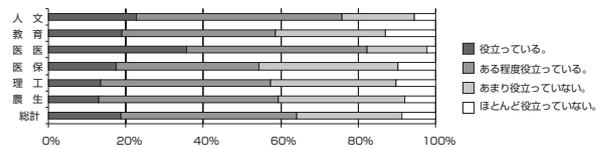
(回答数 779)



設問8：「基礎ゼミナール」は、物事を批判的に検討し、新しい課題を発見することに役立っていますか？

- ・役に立った 146名 (18.8%)
- ・ある程度役に立った 352名 (45.2%)
- ・あまり役に立たなかった 213名 (27.4%)
- ・ほとんど役に立たなかった 67名 (8.6%)

(回答数 778)



文書作成、口頭発表、資料検索についての設問で「役に立った」「ある程度役に立った」と回答した学生は、全体の6割～7割程度でした。また、文書作成や資料検索で最も回答割合が高かったのは人文学部、口頭発表では医学部医学科が最も高い結果であり、いずれの設問でも最も低い割合を示したのは理工学部でした。批判的な見方・考え方、課題発見の設問で、「役に立った」「ある程度役に立った」と回

答した学生は、全体の約6割であり、最も高い割合を示したのは医学部医学科、最も低かったのは医学部保健学科でした。

基礎ゼミナールは、大学の導入科目として位置付けられ、達成目標、クラス編成、評価等々、共通認識の基で各学部学科が担当する科目です。今回のアンケート結果から、各学部学科における基礎ゼミナールの具体的な展開方法、あるいは基礎ゼミナール以外の授業科目で求められる課題の違いを窺い知ることができました。学部学科によって学びが活かされる時期が異なっていることを視野に入れつつも、大学生として必要な学習態度や技能・能力を身につけられるよう、更に基礎ゼミナールの具体的な展開方法の検討を継続する必要があると思われました。

設問9) 履修を希望したが、時間割の関係で受講できなかった科目があれば記入して下さい。

+++++

197名からの回答がありました。回答を見ると、時間割が重複していることにより履修できないケースと、履修制限により履修できないケースとがありました。

まず、時間割の関係で受講できなかったと回答した学生の学部ごとの内訳、授業時間帯ごとの内訳は次の表のとおりです。

人文学部	教育学部	医学部医学科	医学部保健学科	理工学部	農学生命科学部	計
51	31	4	21	29	32	168

木3	木5	火2	木2	木4	火3	金4	金5	その他	計
37	34	27	13	12	9	9	9	18	168

木曜日の午後、火曜日の2コマ目に受講できなかった科目が多いようです。履修できなかった科目に傾向があるというより、むしろ、開講時間帯の問

題のようです。学部によって授業時間帯に多少の傾向が見られました。医学部保健学科では、木曜午後の専門科目教育の開講時間帯と重なっているという理由が大半を占めています。また、農学生命科学部では、専門科目教育と重なるため、火曜日2コマ目の21世紀教育を受講できない学生がいるようです。

21世紀教育科目の開講時間帯には、原則として専門科目は開講できないことになっています(保健学科は例外)。学部への協力をお願いしたいところです。

次に、履修制限により、希望の科目を受講できなかったと回答した学部ごとの内訳は下の表のとおりです。

人文学部	教育学部	医学部医学科	医学部保健学科	理工学部	農学生命科学部	計
43	30	6	13	13	14	119

受講できなかった科目のほとんどはテーマ科目ですが、多岐に及んでいます。上位5科目は、「人間を育む営み(31名)」「生活の科学・技術(12名)」「芸術の世界(11名)」「思想・文学の世界(11名)」「スポーツ実技(9名)」です。



21世紀教育センター・学務部教務課

弘前大学21世紀教育センター

〒036-8560 弘前市文京町1番地（総合教育棟内）

事務担当 学務部教務課課長補佐

TEL : 0172-39-3104

E-mail : jm3104@cc.hirosaki-u.ac.jp

21世紀教育担当

TEL : 0172-39-3106

E-mail : jm3106@cc.hirosaki-u.ac.jp